

---

# ポケモンマスター

悲劇のM

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケモンマスター

### 【Nコード】

N4955E

### 【作者名】

悲劇のM

### 【あらすじ】

ポケモンの二次創作小説です。ちょっと真面目に書いてみました。

降り続いていた雨はやみ、天が二人の戦いを見守るかのように太陽が顔を出した。

今、大勢の観客の視線が注ぐなか、大きなポケモンリーグ特設コロシウムに二人の選手が入場した。

一人はマントを纏っている長身の男。堂々と歩くその様からは、誰もが威風を感じた。歓声があがる。

もう一人は少年だった。赤い帽子に赤い服。先の男と同じ位大きな歓声があがる。

この世界には、ポケットモンスターという動物がいた。

人類は、核戦争で全てを失った過去がある。そしてその時の核放射能により、動物達が突然変異を起こした。

それがポケットモンスター。縮めてポケモン。

約百五十一種類の彼等は、種別毎に体内で様々なエネルギーを生み出す事が出来、それは生きるために使われる他、ポケモン同士の争いの最大の武器として使われていた。

そのポケモン達を人類が労力として、ペットとして、その他様々な目的で飼育するようになった。中でも、ポケモンと共に修行と称して各地に旅するポケモントレーナーという人達は、それぞれ自分達のポケモンの強さを競い合った。

そのポケモントレーナーの頂点を決める大会がポケモンリーグだ。三年に一回開かれる大会で、世界各地から腕に覚えのあるポケモントレーナーが何千人と集まる。

何千人のトレーナーの中勝ち進んできたレッドという名の少年は、前チャンピオンのワタルと対峙した。

「本当にやるんだな」

「ここまで来て俺が引き下がるんでも？」

「フンっ、威勢だけは良いようだな」

ワタルは視線をレッドから審判へと向けた。

「おい審判」

「はいっ。ポケモンリーグ決勝、挑戦者レッド対王者ワタル、試合開始！！」

審判が旗を揚げると同時に響いた試合開始を告げる鐘は、観客の叫びに掻き消された。

「いけっ、リザードン」

レッドがベルトにつけてある三つの小さな赤いカプセルの内一つを投げた。そのカプセルはポケモンを一時的に封印するモンスターボールという道具で、戦闘の際に投げつけることでポケモンを出現させる事のできる、トレーナーにとって最も身近な道具だ。それは質量保存の法則という科学の壁を打ち破った人類の英知の結晶とも言えた。

ソレが地面に落ち、赤い光があがると同時に、リザードンと呼ばれるトカゲが進化したような、翼の生えた巨大な龍が姿を現した。全身朱色の龍で、尻尾の先端には炎が灯っている。

「いってこい、カイリユー」

ワタルの方も同じカプセルを投げつけた。

そこから出てきたのは、レッドの出した龍よりも更に大きい龍だった。

全身が黄色人種の肌色に近く、頭には大きな角が二本。

対戦者に対し慈愛のこもったような優しい瞳を向け、自らの全長より少し小さい両翼を羽ばたかせ空を飛んだ。翼を羽ばたかせる度に、砂嵐が吹き荒れる。

だが、レッドもワタルも、砂嵐など無いかのように立っている。

暫しの沈黙。二人のトレーナーは、互いにどう出るか神経を集中させていた。

「火炎放射だ！」

沈黙を破ったのはレッドだった。

刹那、リザードンの口から熱線が放射された。

そのスピードは凄まじかった。音速の壁を軽く超え、一直線にカイリユーのいる上空へととんだ。だが、カイリユーはそれを余裕で避けた。

「カイリユー、破壊光線だ」

カイリユーもリザードンと同じように口から光線が発射された。

「避けるリザードン」

リザードンは上空に飛び上がった。半秒後、リザードンが立っていた場所に光線が直撃した。

濛々と立ち込める煙がはれた後、そこには巨大な隕石が降ってきたかのようなクレーターが出現していた。

上空にいる彼等の間で空中戦が始まった。

一方が鋼をも切り裂く爪を突き立てると、一方はそれを後ろに避けて光線を発射する。もう一方も熱線を発射した。

それらは空中でぶつかり合い、途端、大きな爆発が起こった。

二つの強力な技が同時に放たれた故の惨事。

二匹の龍は、同時に地面に落ちた。

それぞれのトレーナーが見守る中、起き上がる龍はいなかった。

「両者戦闘不能！次のポケモンを出してください」

審判が白旗を自分の正面に掲げた。

「もどれ、リザードン」

レッドはモンスターボールを突き出した。そこから出た赤い光がリザードンを包み込むと、一瞬の内にモンスターボールの中に吸収された。

「よくやってくれた、ゆつくり休んでくれ」

モンスターボールをベルトに戻した。

「さあ、早く次のポケモンを出せ」

ワタルが言う。

「わかってるよ」

レッドはもう一つのモンスターボールを取り出した。

「いけっ、ピジョット」

モンスターボールからは一頭の大鷲がとび出した。鳥と疑うほど大きな体と両翼。人を乗せて飛ぶ事なんて彼にとっては容易だろう。

「いけっ、プテラ」

ワタルが出したのは、一匹の黒鳥だった。

大きな翼に細長い胴に鋭い眼光。弱いポケモンが睨みつけられたら一瞬で逃げ出すに違いない。

「勝負開始！」

「ピジョット、空を飛べ」

レッドの命令で、ピジョットは上空へ飛んだ。

ピジョットの飛行速度は鳥系ポケモンでも五本の指に入る。空中戦に持ち込めば、こちらの勝率は格段に跳ね上がる。レッドはそう判断した。

案の定、プテラもつられて上空へと羽ばたいた。

だが、ワタルはニヤリと笑みを浮かべた。

レッド達の頭上では、激しい戦いが繰り広げられた。

ピジョットが神速の体当たりを繰り出す。プテラはそれを避け、翼でカウンターをとり、ピジョットの胴体に直撃した。

「な、速い！」

「プテラは鳥系ポケモンで最速のスピードを持つ。ピジョットよりもな」

「くっ……」

ピジョットはプテラの圧倒的なスピードに翻弄された。刃のような硬い翼でピジョットに物理ダメージを与える。

「ピジョット、下がって体制を戻せ。あの技を放つんだ」

ピジョットは後ろに下がり、目を閉じた。精神を集中させているようだ。

「諦めて試合放棄のつもりか？プテラ、切り刻め！！」

プテラは両翼を思い切り動かして風を起こした。それは風の刃と化し、ピジョットへと襲い掛かる。

「今だ！ゴットバード！」

ピジョットは目を見開き、両翼を限界まで広げた。風の刃を突っ切り、そのままプテラへと体当たり。そのスピードは半端ではなかった。両者の距離はかなり離れていたにも関わらず、瞬間移動のような速度だ。それをプテラが避けるのは不可能だった。

両翼は、黒鳥を貫いた。

断末魔を上げながら、プテラは地面に叩き落ちた。

「プテラ戦闘不能！ワタルさんは次のポケモンを出してください」  
ワタルは倒れているプテラをモンスターボールに戻し、別のモンスターボールを投げた。

出てきたのは、先ほどと同じカイリユーだった。

だが、今回の大きさが段違いだった。先のカイリユーの1・5倍はありそうだ。

「勝負開始！」

お互いの手を伺った。カイリユーはそのそと歩いている。その度に地面が揺れた。

「カイリユー、吹雪を起こすんだ！」

ワタルの指令がカイリユーにとどいた瞬間、カイリユーは口から白い冷気を発した。

避ける猶予も無く、それはピジョットの右翼に直撃した。

冷気が直撃した右翼はあっという間に凍りついた。

「どうだ、零下二百度の威力は」

「ピジョット、戻れ」

ピジョットをモンスターボールに戻す。鳥ポケモンの翼が一つでも使えなくなるのは戦闘不能に同じ事を、レッドは知っていた。

レッドは最後の一つのモンスターボールに手をかけた。

「いけっ、ピカチュウ」

そこから出てきたのは、なんと一匹の黄色いねずみのようなポケモンだった。兎のような耳に、背中の縞模様と大きな尻尾が特徴的だった。大きさは小型犬程しかない。

「フハハハ、血迷ったか、そんなネズミを出すとは」

「ふん、試合に集中しろ」

「カイリユー、そんなやつ叩き潰せ」

足を上げた。踏み潰そうとしているらしい。

それをピカチュウは難なく避けた。

カイリユーが地面を踏んだ跡は、くつきりと深く残った。あの大足に踏みつけられたらひとたまりも無い。

いや、踏みつけにかぎらず、カイリユーの攻撃を一度でも受けたらピカチュウは間違いなく戦闘不能になるだろう。

そんなこと恐れる様子無く、ピカチュウはカイリユーを睨み付けた。

「ピカチュウ、十万ボルトだ!!」

ピカチュウから黄色い電気が発せられた。カイリユーに直撃。だが、少しひるんだだけで涼しい顔をしていた。

「電気を操るうが、小さなねずみの攻撃などカイリユーには無意味だ」

ワタルは高らかに笑った。

ピカチュウはまだ電撃をカイリユーにぶつけた。

「無駄無駄!カイリユー、破壊光線!!」

口を開け、光線を発した。

ピカチュウはその隙にカイリユーの背中をよじ登り、頭の上で形容し難い動きをした。

瞬間、空に黒雲が発生した。

「ピカチュウ!かみなりを放つんだ!」

すると、空からごろごろと音が鳴り、ピカチュウに雷が落ちた。

ピカチュウに落ちた雷は、ピカチュウの体内の電気と結合、さらに大きい雷となってカイリユーに当たった。

これにはカイリユーも強烈なダメージを受けた。

カイリユーは倒れた。大きな地震が地響きが起こる。

審判は口を開けたまま呆然として、ハッと自分の仕事を思い出す。  
「カイリユー戦闘不能!よってこの勝負、レッドの勝ち」



新しい王者が生まれ、コロシウムが拍手と歓声に包まれた。

ワタルは悔しさから地面に座り込んだ。そこにレッドが歩み寄り、「いい試合だった、またやろうぜ」

右手を差し伸べた

「ああ」

両者、握手を交わした。

「そんな戦いが、三年前にあったのか」

朱色の服に身を包む少年の名はゴールド。

三年前のポケモンリーグチャンピオン戦の本を熱くなりながら読んでいた。

「って、このレッドって人僕と三歳しか変わらないんだ」

感嘆の声を上げる。

「でも、僕も結構ポケモン強くなったからな、今ならそのレッドって人に勝てるかな」

その時、ゴールドは本のページの隅に気になる事が書いてあるのに気付いた。

「えっと、レッドに会いたい人は白金山ってところに行くと会える？」

それには続きがあった。

「但し、白金山は強い野性ポケモンが沢山出現する。本当に強いトレーナーだけ行くべし」

ゴールドは心躍った。

「よしっ、今から白金山にいったってレッドって人と直接ポケモン勝負しよう」

早速ゴールドは家に書置きを残して、地図とモンスターボールを持って白金山へと出かけた。

移動はマッハ自転車。名の通り最高速度はマッハに達する自転車だ。自動操縦に設定して、自転車に跨った。

そして、彼は知らなかった。次のページに大事な事が書かれていた事を。

一時間ほどして、白金山に着いた。

目に付く物は一面の緑。整備されていない未開の土地が白金山だ。「ここが白金山かあ、よし」

自転車では山に登るのは困難なので、ゴールドは自転車を降りて急な坂道を登っていった。

そこは噂通りの強いポケモンが沢山出現した。だがゴールドはそれ以上に強いポケモンを持っていた。

順調に進んでいき、もうすぐ山頂だ。そこにレッドがいるだろう。ゴールドは手持ちのポケモンを確認して山頂に足を踏み入れた。

そこまで高くはなかった。標高は地上三百メートルくらいだろうか。

そしてそこには、確かに一人の少年がいた。

赤い帽子に赤い服、レッドに間違いない。

「あの、僕とポケモン勝負してくれませんか？」

レッドはこくりと頷いた。

何故喋らないのか不審に思いながら、ゴールドはポケモンを出した。

レッドは予想以上に強かった。ポケモンとトレーナーが一体となつて戦っていた。

だが、ゴールドも強かった。的確な判断と指示でレッドのポケモンの攻撃を防ぎながら攻撃を繰り返す。どちらが勝つか分からない接戦となった。

レッドのポケモンがあと一匹になるまで追い詰めることが出来たが、最後の一匹のピカチュウというポケモンが半端なく強かった。

最大の長所はすばやさ。高速移動を巧みに操り、攻撃の隙を与えなかった。

レッドのピカチュウは驚異的なすばやさで電撃を駆使してゴールドの手持ちのポケモンを次々と倒していった。

そこで最後の一匹、ゴールドもピカチュウを出した。お互い能力はほぼ同じとふんでいる。これなら勝てるかも分からない。

互いのピカチュウはぶつかりあい、電撃をぶつけあい、それを避けつづけた。

勝負は終わらなかった。既に二時間が立っている。それでもピカチュウ同士の戦闘は勢いを増していた。

ゴールドは疲労困憊しているのにも関わらず、レッドは涼しい顔をしている。

その時、二匹のピカチュウの動きが止まった。二匹のピカチュウは少し出てきた黒雲を見逃さなかったのだ。

先ほどは高速で動いていたので分からなかったが、今では二匹とも肩で息をしているのがはっきりと分かる。

空全体を黒雲が覆った。

そして、二匹は同時に叫んだ。

途端に大きな二つの雷が落ちた。双方が互いに出した雷に撃たれたのだ。

二匹の黄色いねずみが、バタリと倒れた。

雷鳴だけが響く。

数秒程の沈黙の後に起き上がったのは、ゴールドの方のピカチュウだった。

ゴールドとレッドはそれぞれ自分の精一杯に戦ったポケモンに駆け寄り、戦いに疲れた者を、ひしと抱きしめた。

ゴールドは、今度はレッドの方へと歩み寄り、ズボンで手汗を拭き取った。

「いい戦いでした、ありがとうございます」

右手を差し伸べた。二人のトレーナーが握手を交わした。

刹那

レッドとレッドのピカチュウが、粒子と化して天へと昇っていった。辺りが光に包まれた直後、ゴールドの頭の中に少年の声が聞こえた。

『チャンピオンになった俺は毎日ポケモン勝負をしていたけど、俺を倒すトレーナーは現れなかった。その後、俺は事故に遭ってポケモンと共に死んだ。俺を倒すトレーナーが現れないまま。

死んでも死にきれないから、ここで俺を倒してくれるトレーナーが来るのをずっと待っていたんだ。

そして、君がそうだった。

これで安心して成仏できる。ありがとう』

その事実、ゴールドは地にへたれこみ、涙を流した。

そして、レッドに追悼の念を込め、手を合わせた。

その後、あるポケモントレーナーが修行のため白金山を訪れた。

山頂に着くと、何故かそこは光に包まれて明るさがあった。中央には簡単な石碑のようなものがある。

そこには字が書いてあった。否。彫られてあった。

トレーナーは目を凝らしてその字を読んだ。

『永遠の王者、ポケモンと共にここに眠る』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4955e/>

---

ポケモンマスター

2010年10月10日03時30分発行